

第二回

一箭を飛して伏者白馬を撰
両郡を奪ふて賊臣朱門に倚

安房は原、總國の南邊なり。上代には上下の分別なし。後にわかちて、上總下總と名けらる。土地擴張して桑弓。蚕飼に便あるをもて、總を買したりしかば、その國をも總といひけり。かくて總の南邊に、居民鮮かりしかば、南海道阿波國なる、民をこゝへ遷し給ひて、やがて安房とぞ呼せ給ひぬ。『日本書紀』景行紀に、所云淡の水門は是也。安房は僅に四郡にして、平郡といひ、長狹といひ、安房といひ、朝夷といふ。

むかし仁安治承の間、平家世ざかりなりし比より、こゝに三人の武士ありけり。『東鑑』にその名見えたる、御厨の麻呂五郎信俊、安西三郎景盛、東條七郎秋則これなり。治承三年秋八月、源頼朝、朝倉石橋山の軍敗れて、安房へ逃ぎ給ひしとき、件の武士等、第一番に隨從ひて、安西三郎景盛は、郷導をつかまつり、麻呂信俊、東條秋則等は、碗飯を献りて、無二の志をあらはせしかば、源氏一統の後、彼人々は、安房四郡をわかち給はりて、子孫十餘世相統し、世は北條にうつり代り、又足利家の時まで、その本領を失はず。景盛が十二世の孫、安西三郎大夫景連は、安房郡館山の城にあり。信俊が後裔たる、麻呂小五郎兵衛信時は、朝夷郡平館の城にあり。又長狹郡、東條が氏族たる、神餘長狹介光弘は、秋則が後として、平郡の瀧田に在城せり。いづれも舊家といひながら、神餘は東條が所領を合して、安房半國の主なれば、長狹平郡の両郡を管領して、家臣徒類少からず。人馬物具いへばさら也。物ひとつとして不足なければ、安西麻呂を下風に立して、推て國主と稱したり。

かゝりし程に光弘は、こゝろ驕りて色を好み、酒に酔りて飽ことなく、側室腰妾尋かる中に、玉梓といふ淫婦を寵愛して、内外の賞罰さへ、渠に問て沙汰せしかば、玉梓に賄賂ものは、罪あるも賞せられ、玉梓に媚されば、功あるも用られず。是より家則いたく乱れて、良臣は退き去り、佞人は時を得たり。そが中に、山下柵左衛門定包といふものありけり。是が父は書讀なる、草料場の預にて、碌々として身まかりしが、定包は人となり、相貌さへ親に肖す、面色白して眉秀、鼻巧して唇朱く、言語柔和の聞えありとて、光弘これを召出して、近習にぞしたりける。

現女謁内奏は、佞人の資也。柵左衛門定包は、陽に行状を慎て、陰に奸智を逞し、栄利を謀る癖者なれば、初より玉梓に、佞媚すといふことなく、渠が好む物といへば、價を厭す贈る程に、漸々に出頭して、口才主君を歡せ、酒醪を催し、淫樂を勤め、刺玉梓と密通して、尾函の拳動爰かりけれども、光弘は露ばかりもこれを曉らず、いく程もなく定包を、き甲の上にてをひせ

藩屏の賞罰大小となく、皆任用たりければ、その権山下一人に帰して、主君はあるもなきが如し。かくて志気あるものは、主を諫かねて身退ぎ、又勢利に憑ものは、をさく媚て定包が、尾鬣の塵をとりしかば、黨を樹て、讒を興ぎ、利書を説て、舊法を更め、税斂を重し、課役を累て、民の冤を見かへらず。現この山下定包は、神餘が家の禄山なるかな。そが出仕する毎に、白馬に騎しかば、目を側て是を見るもの、密々に白妙の、人啖馬と渾名肩して、たまく途にあふときは、避かくるゝも刃かりけり。

不題 瀧田の近村 蒼海香といふ処に、杣木林平と喚るゝ、莊客ありけり。戦國の治俗とて、擊劍拳法いへばさらなり、臂力剛く、こころ悍く、難に臨て死をだもおそれず。伉俠を立るものなりければ、神餘の家則いたく乱れて、民のわづらひ大かたならず。緯みな山下柵左衛門が所行なるを見て竟に得堪す、われに些も劣らざる、洲崎の無垢三といふ、友だちを、潜やかに招きよせ「和主は何と思ふらん。白妙の人啖馬は、權を恣にして民を虐、田園に禍すること、蝗のむしより酷しく、罪なき人を屠ること、疫鬼に異ならず。這奴なほかくてあらんには、我も人も何をもて、こゝに妻子を養ふべき。苛法に隨ふも、みな是命を惜はなり。斯年々に筆とられて、餓も凍もしたらんには、法も崇もおそるゝ事かは。所詮二人が身を棄て、人啖馬を擊殺し、夥の人の苦を抜ば、いと愉き事ならずや」と諱れて無垢三は、「一議に及ばすうち點頭、」あな勇しくもいはれたり。われも又この事を、思はざるにあらねども、這奴は威勢國主にまして、出るときも入るときも、数十人の従者あり。もしかるゝしく手を下さば、毛を吹疵を求やせん。笑の中に刃を隠す、人の心の憑しからねば、けふまでは黙止たり。しかるに和主ゆくりなく、心中の機密を告てわれと志をおなじうす。夥の翼を獲たるに勝れり。さればとて、卒介に緯をはからば、化に命を失れん。もしくは這奴が遊山の折、従者も衆からぬ、微行の日を俟ば、ほめを遂すといふことあらじ、と思ふはいかに「と密語は、林平斜ならず歡びて」「しからばとせよ、斯せん」とて、送に耳をとりかはし、密談数度に及びけり。

現楊震が四知の誠め。壁にも耳のある世なれば、はやくもこの事をしれるもの、柵左衛門にぞ報知たりける。定包はこの訴に、騒きたる氣色もなく、俄頃に夥兵を召聚へて、彼林平無垢三等を、搦捕せんとしたれども、忽地思ひつくことありて、別に謀を獲たりしかば、件の事ははじめより、そらしらぬおもちして、只従者の数を倍し、晨に出す夜行せず。をさく仇を禦ぐ程に、主の長挾介光弘は、長夜の淫樂に、その身を忘れて、日々月々に病を生じ、美酒珍饈も甘からず。鄭声艶曲も樂からねば、不死の薬を蓬萊に求め、不老の術を方士に問けん、秦皇漢武の物思ひに

異ならず。

玉梓が膝を枕にして、帳中を出ざれば、折こそよけれ、と定包は、有一日主君にまつすやう、「時はや夏の初に、野山の新樹もいと愛く、落羽騾の野鶏、青麥村の雲雀、処得がほに集なる。閑居てのみ座をば、病をまさせ給ひなん。狗を走らせ、鷹を放き、養生のひとつにこそ。某おん眞仕らん。おもひ立せ給はずや」とそこのかす傍より、玉梓これを興じつゝ、もろ共に勸しかば、光弘やをら身を起し、「われとにかくに懶くて、久しく城外へ出ざりき。今你達が諫言は、口苦からぬ民衆とおぼゆれば、翌は早返で持倉すべきに、まじこの旨を令じらして、準備させよ」と仰れば、定包扇を笏にとり、「御説では候へども、近年公務いと繁くて、民その課役に勞れたり。加旗畑を打、種おろしする比なれば、潜びて出させ給へかし。某おん供つかまつれば、よろしく計ひ候ひなん。土民等畷作に煩ひなく、程經てこれをしてるならば、誰か仁君といはせざるべき。これも亦民を使ふ、一術に候はずや」と言葉巧にまつすにぞ、光弘感嘆大かたならず、「いはるゝ所道理に稱へり。寔に家の老たるものは、誰もかくこそあるべけれ。さらばこの議に任せん」とて、列卒従者の数を省きて、那古七郎、天津兵内などいふ、近習八九人のみに、従行の準備させ、詰旦光弘は、韋毛の馬にうち騎て、狗を牽し、鷹を駕させ、潜やかにぞ出たりける。却説山下柵左衛門定包は、豫て謀りし事なれば、前日城より退るとやがて、落羽青麥の村長等を猛に召よせ、「われ邂逅に休暇を得たれば、翌は如此々々の処に出て、放鷹せんと思ふ也。兪この旨をこゝろ得よ」といと嚴にいはせにければ、村長等は走りかへりて莊客們を驅催し、途の掃除に篝目のゆきとゞくまで罵騷げば、杣木朴平無垢三等は、「漸こゝに便宜を得て、翌は必本意を遂げき時來れり」と竊に歡び、兩人列卒に打扮つゝ、弓箭手挟走り出、その夜丑三の比及より、落羽騾の東北なる、夏草ぶかき岡に躲れて、古たる松を盾にとり、「定包遅し」と俟てをり。短夜なれば墓なくて、鶏鳴曉を告る比、長狹介光弘は、鹿皮の行膝に、綾蘭笠ぶかくして、列卒を馬の前に立せ、那古天津の近臣等、八九人を左右にして、滝田の城を出しかば、山下柵左衛門定包は、豫て非常に備んとて、夥兵私卒許多將て、彼白馬にうち騎つゝ、些後れてうたせたり。固より謀ることなれば、馬奴等さへ荷擔れて、朝立の秣に、毒を加て餌たりけん、光弘の乗れる馬、ゆくこと十町あまりにして、暴に病て拍ども進まず、前足折て撲地と臥せば、ぬしも俯に鞭びかゝるを、那古七郎、天津兵内、慌忙き扶起して、「おん騎替をとく牽」と声高やかに喚立れば、従者更に劇惑て、後陣へ如此々々と告しかば、柵左衛門定包は、鞭を揚て走らし來つ。馬より閃りとをりたちて、光弘にまつすやう、「潜びて獵に出させ給へば、それまでは準備せざりし、騎替を待給

はゞ、徒に時や移らん。某が馬こゝに在り。年来曰く畜狎せしに、鞍味もいと愛たし。乗せ給へ」とそがまんに、轡を牽よすれば、光弘忽地氣色なほりて、立させたる床几をはなち、「然らばその意に任せんす。汝はこゝに休ひて、予が騎替に乗て來よ。ものども急げ」といひあへず、鞍に手を掛跨る馬の、尾筒も鞘く目開。風見が原の卯花も、東も白くなる隨に、樹立際なき病葉の、落羽驟に近づきぬ。

この日の俚にたちたりし、那古天津の面臣のみ、山下が蔭を仰がず、主に仕て大かたならぬ、誠心あるものなれば、このとき思ふよしやありけん、先に立たる列卒に誨て、「青麥村のかたへ」とて、猛に途をかえんとすれば、光弘これを訝りて、「汝等は何処へ行るぞ。けふの持場は落羽が岡也。この比はいぎたなくて、寐惚たる故」と敦圍は、七郎兵内左右より、密やかにまづすやう、「君は暁らせ給はずや。乗馬の暴に斃れたる、吉祥せとは覚ぬに、落羽に落馬の首誨かよへば、名詮自性甚忌し。加以、室町殿の武威撓て、兵乱休ときなきものから、安房は東南の盡処なれば、幸にして無事なれども、國に野心のものなしとは、必しもいひかたし。然るを潜ひて出させ給ふ。是すらいとも危きに、忌諱をも避す、不祥にも憚給はず、遠き慮ましますは、近き憂をいかにせん。猛に途をかえんとせしは、この故に候」と兩人齊一諫れば、光弘聞て冷笑ひ、「女々しき事をいふものかな。活る物は必死す。斃し馬に何かあらん。されば又、けふの持場を、落馬と喚ばゞ諱よしあらぬ。落羽は落る鳥なれば、獲よかる祥ならずや。彼方へ行れ」と鎧を鳴らし、馬の足掻を早むれば、那古天津等はせんすべも、なつ草繁き驟道、初のごとく先を追ひて、落葉驟の邊なる、落葉が岡に來にければ、宵よりこゝに躲れたる、仙木林平、洲崎無垢三、木立の際より信と見て、「白馬に騎たるは、紛ふべうもあらざりける、山下柵左衛門定包也」さはとて伏たる所に、箭刺て、きりきりと鬢紋り、矢比近くなる隨に、「一二を定めて強と發せば、六連はず一の矢に、光弘は胸を射られて、叫びもあへず仰さまに、馬より挫と落しかば、「これは」と駭く天津兵内。二の矢に吭をぐさど射られて、おなじまくらに仆れけり。「すは癖者や」といふ程に、徒者等は劇騒くのみ。敵の多少を測かねて、撃とらんとせざりしかば、那古七郎眼を瞪らし、「いぶがひなき人々かな。今眼前に主を撃して、何か躊躇ことあらん。よしや木立は深くとも、数町に足らぬこの岡の、樹を伐草を交竭しても、搜出さで已ぶき故」と罵あへず刀を抜て、主に離れし馬の障泥を、切ときて盾としつ、引被きて走登れば、衆皆これに激され、鬪を定かに認めねども、「われ撃とらん」と進みけり。朴平無垢三これを見て、「近づけてはかなはじ」とて、樹立の蔭より頭れ出、さんさん射たりしかば、先にすゞみし列卒十餘人、瞬間に射殺さる。しかれども彼兩人

は、矢種もこゝに竭しかば、弓を夏哩と投棄て、大刀真額に抜鬃し、岌に懸て欲立れば、この勢ひに碎易して、奴隷は大かた逸失たり。残るは近臣七八人、力を戮して戦へども、不知案内の山阪なり。株に跌き、藤臺に、足をとられて、輾轉、或は撃れ、或は又、瘡を肩ざるはなかりけり。

そが中に、那古七郎は、「且く賊を疲労して、坦地へ詔引出させ」とて、且戦ひ、且走れば、無垢三は先に進み、林平は後に続て、「脱さじ」と追蒐來つ。思はず

【挿絵】「落葉岡に林平無垢三光弘の近習とたゝかふ」「山下定かね」「那古七郎」「仙木ノぼく平」「洲さきのむく蔵」「天津ノ兵内」

坂を下りしかば、七郎信と見かへりて、忽地礮と打掛る、礮に無垢三額を傷られ、目眩きてや俊俊とこころを、那古は雌手より走よせて、無垢三が膺より、乳の上かけて丁と砍る。斬られて仆るゝ背の上へ、のぼしかゝつて頸撞落し、立あがらんとする程に、林平は血刀引提て、飛鳥の如く走り來つ。七郎が右の肘を、ばらりずんと砍落し、怯む処を突倒して、再三たび刺す刃に、流れ下垂る血を啜て、しばし咽喉を潤す折、前面の樹陰に弦音して、誰とはしらず發矢に、林平は股を射さして、倒れんとして、膝を突留、矢柄を颯で抜搦れば、耳を貫く鬨の聲、劔に咄と響て、捕手の兵數十人、はや森々と取巻たり。

當下山下柵左衛門は、箭を肩、弓を挟みて、岡の檜に馬を馳よせ、「國の為には数代の主民の為には父母なる殿を、杖ひ奉りし逆賊等、山下定包を認らずや。目今一箭に射て殺さんは、金の鎚をもて、鶏卵を砕くより易けれども、爰所を除しは生ながら、捕捕せんと思へばなり。彼縛めよ」と令すれば、威風に靡く夥兵の大勢、手捕にせんと鬨たり。

林平は「定包」と、名告るを聞て仰天し、「原來わが箭に射て落せしは、人駁馬にあらざりけり。謀りしことは飛鳥の、鴟の背と齟齬て、國主を害し奉れば、叛逆の罪脱るゝ途なし。怨は積る山下定包、擲撃にすべけれ」とて、甲高ところに引退き、草に伏、木を潜り、是首に顕れ、彼首に隠れて、且く防ぎ戦ふものから、矢傷に進退はじめに似ず、砍れども衝ども大勢也。捕手はますゝ累りて、とかくすれども定包に、近づくことを得ざりしかば、是まで也と思ひけん、腹を切らんとする処を、先に進みし両三人、左右より組留て、やうやく索をかけしかば、定包は時を移さず、更に夥兵を部して、癖者の支黨を、隈なく撈索にけれど、故より件の二人が外に、隠れ潜るものなかりけり。

浩処に城中より、老黨若黨數十人、轎子を打しつゝ、主の迎にまありしかば、定包縁由を告て、まつ光弘の亡骸を、轎子へ挿入させ、高手腕手を綁たる、林平を牽立させ、無垢三が首級をもた

し、主の死骸の後に跟着、滝田の城にかへりしかば、衆皆呆果たるのみ。家の老などいふものすら、只定包が權威におそれて、絶て一向も渠を詰らす、當座に賊を搦しことのみ、只管稱賛したりしかば、是よりして定包は、ますく傲慢りて、諸司ともいはす、近習ともいはす、奴僕のごとく召使ひ、次の日光弘の棺を出して、香華院へ送る程に、罪人杣木平は、手痕だに堪がたきに、間なく咎に打責られて、その日獄屋に死にければ、定包令して首を刎させ、無垢三が首級もるとも青竹の串にさして、棟の梢に梟たりき。加以、日来己を譏るものをば、「皆林平が支黨也」とて、一人も洩さず搦捕り、このときに殺してけり。

さても林平無垢三は、海岸の民なれども、武藝力量人に傳れ、神餘が家臣等も要せざる、賊臣定包を撃んとせし、志は剛なれども、彼が梟雄の智に勝ことかなはず、不覺に仇の悪を佐けて、夥の人を連累せり。無慙といふも疎なるべし。

却説山下定包は、緯十二分に謀得たれば、有一日老臣近臣等を、城中へ召聚るに、僉遣りなく参りにけり。その緯の為体、定包は長袴に、烏帽子の掛緒長して、大刀を跨つゝ上座に推處り、又礼服の下に身甲したる、力士十二人を僣立て、おのが左右に侍らせ、さて衆人に對ていふやう「先君不慮に世を去給ひて、おん子ひとりも在さず、隣郡他家より擇とりて、世子を立んと思へども、館山の安西氏、又平館なる麻呂氏も、女子のみにして男子なし。こはいかにしてよからん」と問つゝ席を見わたしたる、面を向上げるものもなく、僉もろともにまづすやう、「山下大人は徳高く先君に功あること、鎌倉の執權たりし、北條氏にも倍給へり。なき世子を求めんより、みつから両郡を知召れよ。わが君と仰ぎ奉り、忠勤を励んに、なでふことの候へき」と飽まで媚て回答しかば、定包莞尔とうち笑みて、「われにその徳なれども、今もし衆議に従はずは、人の望を失ひて、この城ながく保ちがたけん。われ且撰に二郡を領して、徳ある人に譲るべし。野心を存することなけれ」とて、誓書に血を沃がせ、更に酒宴を催して、禄をとらせしかば、みな萬歳と祝しけり。

かゝりし後、定包は、滝田の城を更めて、玉下とこれを名け、玉梓をおのが嫡妻にして、後堂に冊せ、その餘、光弘の嬖妾にかはるゝ枕席をすゝめさせ、富貴歡樂を極めしかば、威を隣郡に示んとて、館山平館へ使者を遣し、「定包不肖にして、思ひかけなく、衆人に推尊れて、長狹平郡の主となりぬ。かゝれば更に両君に、好を結んと思ふのみ。此方よりや推参すべき、其方よりや來臨し給ふ。左右は賢慮によるべし」といと無礼にいはせしかば、麻呂安西は呆果て、媚と思へど一朝の議にあらず。「是より返答すべけれ」とて、その使者をかへしてけり。

さればこの館山の城主たる、安西三郎大夫景連は、力剛く心悍くて、しかも謀を好めども機に

臨て決断なし。又平館の城主たる、麻呂小五郎信時は、利に進み人を侮る、倉藝匹夫の勇將なれば、安西に謀じ合して、定包を討んとて、有一日近臣のみを將て、潜に館山の城に赴き、景連に對面して、定包が綯の趣、思ふよしさへ密談し、「和殿某力を戮して、安房朝夷の軍兵を引率し、瀧田の城を攻んには、勝利疑ひなきもの也。定包腕ご首を授て、彼両郡をわかちとらば、愉き事ならずや」と忽卒に勸説せば、景連頭を左右にうち掉、「畿内坂東大かたならず、兵乱に苦めども安房は年來無事にして、士卒軍馬のうへに熟れず。彼山下は大身なり。主の所領を手も濡さず、わが物にしたるを思へば、その才その智測がたし。衆人彼を推尊み、主とし仕て貢なきは、その徳その義推て知るべし。天の時は地の理にしかず、地の理は人の和にしかず。定包既に時を得て、地を得て、人の和を得たり。自他の分限を量らずして、牛角の合戦心もとなし。且く渠に帰降して、當郡へ誑引よせ、伏兵をもて急に撃ば、擒にすることもあらん哉。しかれども、漢楚鴻門の一會に、彼范増が策成らずは、勞して功なきのみならず、草を打て蛇に驚く、後悔其処に立たし。且く時を俟給へ。一たたび滝田に変を生じて、衆人離れ肩くに至らば、攻ずとも必潰ん。はやることかは」と禁れば、信時迂遠として、議論區々なる折から、安西が近臣遽しく廊より遶り來て、ちをら障子を推開き、且く氣色を窺ふ程に、主の景連、佶と見て、「何ぞ」と問ば、小膝をすゝめ、「里見又太郎義実と名告れる武士、年十八九とおぼしきが、従者僅に二人を將て、推參して候かし。よりてその、來由を尋候へば、『下総結城の落人也。父季基は討死し、その身は枚倉堀内といふ、兩個の老黨とくもに、相模路へ没落し、三浦より渡海して、當国白濱へ來着せり。この餘の趣意は人傳に、申入るべきことにあらず、只見參こそ願しけれ』と他事もなくまうすなる。いかゞつかまつるべうもや」と辭せわしく告しかば、景連頓に回答かねて、「それはこゝろ得ず」とばかりに、頭を傾け、眉を頻め、沈吟じてぞゐたりける。